
コ哀のホワイトデー

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コ哀のホワイトデー

【Nコード】

N3930G

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

ホワイトデー記念小説。2パターンの話で書く、コナンと哀のホワイトデー話。

誘拐事件編（前書き）

この小説はコ哀のカップリングですので、苦手な方はご注意ください。

誘拐事件編

3月14日はホワイトデー。

2月14日のバレンタインデーに女の子からチョコもらった男の子が、そのお返しをする日である。

どんなお返しをすれば良いのか、悩む者も多いという。

江戸川コナンも、そんな男の子の内の1人だった・・・

ホワイトデーより1週間ほど前・・・

「灰原からチョコもらったのは良いけど、どんなお返ししたら喜ぶかな・・・」

江戸川コナンは、バレンタインでチョコをくれた哀に対するお返しの事を考えていた。

「フサエブランドの商品は高くて手が出せねえし、だいいちアイツの事だから博士に買ってもらってるだろうしなあ・・・」

コナンは悩む。

そんなコナンの元に、東尾マリアがやって来た。

「コナン君、哀ちゃんに対するお返しの事考えとるんか？」

「ああ。アイツがどんなお返しなら喜ぶかを考えてたんだけど・・・
マリアちゃん、心当たりないか？」

普通、女の子にそんな事聞くか？

そんな事を思いながら、マリアは返答する。

「そやねえ・・・ウチもそうやけど、やっぱ手作りのお菓子が一番
喜ばれるんちゃうか？」

「手作りのお菓子か・・・作った事ねえし、苦手だな・・・」

「そやったら、ウチが手伝おうか？オカンの手伝いで作った事ある
から得意やで。」

「じゃあ、お願いしようかな・・・」

こうして、コナンはマリアにお菓子作りの指南をお願いしたのであ
った。

そして、ホワイトデーの前日・・・

3月13日

コナンはお昼前、探偵事務所から出かけようとしていた。

「おじさん、ボクちょっと買い物に行って来るから・・・」

「何か用事でもあるのか？」

「ちょっとね・・・あ、14時頃にマリアちゃんが来る事になってるから・・・」

「同級生の東尾マリア君の事か？」

「うん。じゃあ、行って来るね。」

そう言うと、コナンは毛利探偵事務所から出かけて行く。

そんなコナンを、怪しい男女が監視していた・・・

米花デパート

コナンは米花デパートに買い物に来ていた。

「フウ、こんなトコかな・・・」

コナンはカートに色々詰めている。

しばらくして精算を済ませると、コナンは買い物袋に商品を詰め、デパートを出た。

コナンは毛利探偵事務所に向かって歩いていった。

「お菓子作りなんてキャラじゃないけど、頑張らなきゃな・・・灰原のヤツ、喜んでくれると良いけど・・・」

コナンは哀の事を考えている。

そのせいか、コナンは後ろから近づいている影に気づかなかった。

そして、次の瞬間・・・

フワッ！

「わっ!？」

コナンは何者かに羽交い締めにされた。

「な、何なの？は、放して!」

コナンはもがく。

影は無言でハンカチを取り出すと、コナンの口と鼻を覆った。

「うっ!!」

コナンはしばらくもがいていたが、やがて気を失ってしまった。

買い物袋がコナンの手から離れ、地面に落ちる。

ポサッ！

影は落ちた袋には目もくれず、コナンを連れてその場を去って行った。

30分後、哀は毛利探偵事務所に来ていた。

コナンにお昼でもごちそうしようと思ったからである。

「江戸川く〜ん、お昼一緒に食べない〜？」

哀はドアをノックする。

「おや、哀君？」

小五郎が事務所から出て来た。

「おじさん、江戸川君は？」

「コナンなら、買い物に行ってるぞ。何ならここで待つか？」

「あ、はい。」

哀はそう言うのと、事務所の中に入った。

哀はそれから1時間ほど待ったが、一向にコナンは帰って来ない。

「帰って来ないな・・・」

「（もしかして、何かあったのかしら・・・）」

哀がそう思っていると、ドアがノックされた。

コン、コン！

小五郎がドアを開けると、そこにはマリアが立っていた。

「あら、東尾さん！どうしてここに？」

「コナン君に手伝い頼まれとったから、探偵事務所に来たんや。そうしたら、途中の道端でこんな物見つけてな・・・」

マリアは買い物袋を見せる。

「買い物袋じゃないか。」

「（買い物袋が道端に落ちてた・・・？ま、まさか！！）」

哀はすぐ、阿笠邸に携帯電話を取りに行った。

同じ頃、コナンは倉庫のような場所で目を覚まそうとしていた。

「起きな、ガキ。」

「ん・・・」

コナンの目を覆っていた布が外される。

パラッ！

「う・・・オ、オマエは！？」

「久しぶりだな、ボウズ。」

そう、前に歩美の住んでいるマンションに押し入り歩美を襲った空き巣、中川実だった。

「アタシもいるわよ。」

「ア、アンタまで・・・！？」

実の横にいるのは、同じく前にマンションの女性殺人未遂事件でコナンが倒した長谷川郁代だ。

「気分はどう？ボウヤ。」

「イヤな気分だよ。こんな状態にされて・・・」

そう、コナンは手足と体をロープでグルグル巻きに縛られている状態だった。

「何のためにボクをさらったの？」

「決まっている、金さ。」

「ま、資金調達ってトコね。」

コナンは2人を睨んでいる。

すると、突然電話の着信音が鳴った。

ピリリ、ピリリ・・・

「何だ？」

実はコナンのズボンを探り、携帯電話を取り出した。

パツ！

「あ、返してよ！」

「うるさい。」

郁代はそう言うと、コナンを抱え込み口を手で塞ぐ。

ガバツ！

「うっっ！！」

実が電話に出ると、哀の声が聞こえた。

「江戸川君、あなたどこにいるの？無事なの！？」

「フン！安心しろ、無事だ。」

「あなた、誰よ！？」

「前にオマエらにやられた空き巣だと言えば、わかるかな？」

「！！あの時の！？」

「気づいたか。コイツの保護者に伝えろ。ガキは預かってる。返して欲すれば金を用意しろとな。」

「わかったわ、用意する。その代わり江戸川君の声を・・・」

「額は3000万だ。場所は北杯戸町の倉庫。なるべく早くしろよ。」

実は一方的に要件を言うと、電話を切った。

ピッ！

「江戸川君！！！」

哀の叫び声が届く事はなかった。

「灰原、灰原あ！！」

コナンは叫んでいる。

「うるせえガキだ。郁代、コイツの口塞いどけ。」

「はいはい。」

郁代はガムテープを切り、コナンの口に貼った。

ビーツ！

ペタッ！

「んゝ、んゝ！！」

コナンは口を塞がれてしまった。

「身代金3000万か・・・」

「一番上だけ本物にして残りを新聞紙にすれば、トランクに詰めるだけでごまかせます。身代金は私が・・・」

「わかった。気をつけてくれよ。」

「わかってます。」

小五郎はトランクに新聞紙を敷き詰め、一番上に本物のお札を並べる。

「これで良しと。」

「移動手段やったら、ウチが乗って来た自転車を使い。走るより速いやる。」

「ありがと、東尾さん。じゃあおじさん、行って来ます。」

哀はトランクを持って出かけて行った。

30分後、哀は北杯戸町の倉庫にやって来た。

「持って来たわよ!」

哀が叫ぶと、ガレージが開いた。

ガラガラ・・・

哀は中に入る。

「持って来たか。」

哀は実と郁代の後ろにコナンがいるのを確認した。

「江戸川君を返してよ。」

「フン、金が先だ。」

「そんなに欲しけりゃ・・・くれてやるわよ!!」

哀はそう言うと、キック力増強シューズでトランクを蹴り飛ばす。

ドゴォ!

「グハッ!」

実はトランクを顔面に受け、吹っ飛んだ。

「な、何すんのよこの小娘!!」

郁代は哀に襲いかかろうとしたが、哀は麻醉銃を構え郁代めがけて発射する。

パシュ!

プス!

「う!」

郁代は倒れ込んだ。

「江戸川君!!」

哀はコナンの元に駆け寄る。

「大丈夫?」

哀はコナンを縛っているロープを解いた。

ゴソゴソ、バサッ！

「大丈夫だよ、ありがとな。」

コナンはガムテープを口からはがしながら言った。

「警察に通報する前に、コイツらを拘束しよう。」

「そうね。」

コナンと哀はロープを使い、実と郁代をまとめてキツめに縛り上げる。

そして警察に通報すると、倉庫を後にした。

翌日、阿笠邸

コナンは阿笠邸のキッチンで、マリアと共に作業していた。

哀はソファで本を読んでいる。

そして、1時間後・・・

「やっとできた・・・」

「よう頑張ったな、コナン君。」

「一体何ができたの？」

哀がキッチンにやって来ると、そこには・・・

「わぁ、おいしそうなクッキー！」

そう、コナンがマリアに手伝ってもらい作った手作りクッキーが3種類並んでいた。

「このダイヤ型の四つ葉クローバーの形したクッキーは、抹茶味だよ。」



「へえ。」

「こっちの哀ちゃんの顔を模したクッキーは、チョコ味なんやで。」

「以前蘭さん達が作ったのとソックリ！」

「んでこの大きいダビデの星型のクッキーが、バニラとイチゴ味だ。」





「2種類の味があるのね。それにしても上手だわ。」

哀は感心している。

「あら？このダビデ星クッキーに刻まれてるイニシャルって私と江戸川君の名前の頭文字・・・」

そう、ダビデの星型クッキーには『A×C』のイニシャルが刻まれていた。

「江戸川君、このクッキーってもしかして・・・」

「ああ・・・バレンタインのお返しだよ。」

コナンは頬を染めながら言った。

「コナン君な、哀ちゃんに喜んでもらいたいっちゅうて、頑張って練習したんやで！」

「江戸川君・・・ありがと、とても嬉しいわ。」

「灰原・・・」

「2人共ラブラブでええなあ〜♪」

マリアがコナンと哀を冷やかす。

「・・・」

2人は赤面した。

「ほな、ウチはもう帰るわ。2人の甘い時間を邪魔したないしな♪」

マリアはそう言うのと、帰って行った。

「もう・・・」

「マリアちゃんってば・・・」

コナンと哀はお互いに顔を見合わせ、また頬を染める。

2人はその後、仲良くクッキーを食べたのだった。

殺人事件編（前書き）

この話には、ニンテンドーDSソフト『名探偵コナンVS金田一少年の事件簿・巡り会う2人の名探偵』のネタバレが少しあります。先にゲームの方をプレイする事をオススメいたします。

殺人事件編

3月14日はホワイトデー。

2月14日に女の子からチョコレートをもらった男の子が、そのお返しをする日である。

ホワイトデーの前日、3月13日・・・

灰原哀からチョコレートをもらった江戸川コナンは、彼女へのお返しを何にするか悪戦苦闘していた。

光彦と元太に聞いてみたが、全く参考にならず。

偶然帰り道で会ったたくまに聞いてみたところ、『その子が一番喜ぶ物をあげたら良いんじゃないかねえか』と愛想のない答えが返ってきた。

コナンはたくまに一応お礼を言い、探偵事務所に帰ったのは良いのだが・・・

その『一番喜ぶ物』が思い浮かばず、またも悪戦苦闘していた。

「灰原のヤツ、何をあげたら喜ぶかなあ・・・星を見に行った時は、フサエブランドのウォレット頼んできたし・・・やっぱり高い物なんだろうか・・・」

コナンは頭をかく。

「一応母さん達から仕送りしてもらって貯金してあるし、下見にでも行ってみるか・・・」

コナンは米花デパートへと出かけて行った。

米花デパート

コナンは、5階にある服売場を回っていた。

「ブランド物っていったら、服なんかもそうだな。でも男のオレじゃ女物の服は買えねえし・・・蘭に頼んでも良いが、冷やかされても困るしなあ・・・」

コナンはノドが乾いたのでひとまず服売場を後にし、地下1階の食品売場に行く事にした。

「何にしたもんかな、アイツへのお返し・・・」

コナンは考え事をしながら、地下1階を回っていた。

途中のバーカウンターで買ったメロンジュースを飲みながら。

「手作りのクッキーとかでも良いけど、オレのガラじゃないしなあ・

・・」

コナンは考え込んでいる。

「そういや7階にはバッグとかが売ってたな。値段の調査も兼ねて行ってみるか・・・」

コナンは7階に行く事にした。

コナンは7階に来ている。

「ここだったな、ブランド物売り場は。さて、アイツが欲しそうな物はっと・・・って、高っ！！」

コナンはサイフやバッグの値段を見て、絶句した。

「どれも高すぎるな、ブランド物は・・・まあ、いざとなったら仕送りのお金使えば良いけど・・・何か腹減ってきたな・・・また地下1階に行くか・・・」

コナンは再び地下1階に向かった。

コナンが地下1階来ると、警察官が数人いた。

「あ、高木刑事！」

コナンは高木刑事を見つけ駆け寄る。

「ああ、コナン君じゃないか。1人で買い物かい？」

「うん！高木刑事はどうしてここに？」

「この地下1階で殺人事件が起きてね。今現場検証中だったんだ。」

「フウン・・・ねえ、その現場を見せてくれない？」

「別に良いけど・・・」

渉はコナンに現場を見せた。

「被害者は飲み物等を扱ってるバーの男性店員でね。事件当時は隣の店のイスに座っていたんだ。」

「死因は？」

「死因はアイスピックだよ。ピックの先に毒物が塗られていたんだ。」

「なるほど・・・それで？彼の他に店員は？」

「同じくバーの従業員をしている女性がいるよ。」

「じゃあ、その人が犯人？」

「そうだと思うんだけど、どうやって凶器であるアイスピックを被

害者に命中させたのかがわからないんだよね。」

「バーから被害者を狙ったんじゃないの？」

「それだとかかなり不確実なんじゃないかな？ 事件当時は被害者の隣に誰もいなかったけど、もし誰かがいたらアイスピックはその誰かに刺さってしまうだろう？」

「あ、そっか。」

「とりあえずボクは、現場にいた人達からもう1度事情聴取して来るから・・・」

そう言うと、渉は走って行った。

「にしてもどうしたものかな？ トリックも動機も全然わからねえし・・・このままじゃ、アイツへのお礼が一向に買えねえし・・・」

「アイツへのお礼って、何？」

「おわあ！！って、灰原・・・？ 何してんだよオマエ、こんな所で・・・」

コナンの前には、哀が立っていたのだ。

「何って・・・夕飯の買い出しに来たのよ？ あなたこそここで何してるの？」

「えっと・・・ここで殺人事件が起きたんだよ。」

コナンは哀に事情を説明した。

「フウン・・・それで、あなたはトリックが解けなくて困ってるのね？」

「あ、ああ。まあな・・・」

「工藤君、私にもその現場見せてくれない？」

「ああ。じゃあ行ってみるか・・・」

コナンと哀は現場に向かった。

事件現場

「ここで事件が起きたのね？」

「ああ。殺されたのはこのバーで働いてる男性で、容疑者は同じ店員の女性なんだが、トリックが全然わからなくてな・・・」

「フウン・・・」

哀はバーの裏に回る。

「ハハーン、そういう事ね・・・わかったわよ？トリックが何なのか。」

「な、何い！？解けたのかオマエ！？」

「何驚いてるのよ？」

「イヤ、別に・・・（よもや女の子の灰原にトリックを先に解かれるなんて・・・ちょっと悔しいな・・・）じゃあ、高木刑事呼ぼうか？」

「そうね。」

コナンと哀は、渉を呼んだ。

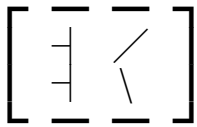
「トリックがわかったって本当かい？」

「ええ。犯人は被害者の行動パターンを把握してたのよ。被害者が特定の時間になると、隣の店に行く事もね！犯人は被害者が隣の店のイスに座ったのを見届けるとあらかじめ用意しておいた殺人装置を仕掛け、それを作動させて殺人を実行したのよ！！」

「一体、そのトリックは・・・？」

「これよ。」

哀は渉にメモ帳に描かれた装置を見せた。



「ワインの箱にボウガンを仕掛け、矢の代わりにアイスピックを使

ったのよ。後はアイスピックの先に毒を塗っておけば、当たるだけで毒が被害者の体に回り死に至らしめる事ができるってワケ。」

「なるほど・・・」

犯人は、被害者と同じバーの店員である女性だった。

阿笠邸

「にしても驚いたぜ。まさかオマエに先にトリックを解かれるなんてなあ。」

「あなたこそ珍しいわよ。いつもならこんなトリックなんてアッサリ解けるハズなのに・・・何かワケでもあるのかしら？」

「それはだな・・・」

「さっきの態度でピンときたわ。あなた、私へのバレンタインのお返しを考えてたんでしょ？」

「ゲッ！何でそんな事まで・・・」

「女のカンをナメちゃいけないわよ。」

「そ、そうか・・・」

「まあ今回の事件を解決できたのは私のおかげだし・・・フサエブランドの新作のサイフとバッグと洋服で手を打ってあげるわ♪」

「み、3つもかよ!？」

「何か文句でも？」

「いえ、ありません・・・」

結局オレは両親から仕送りされたお金で、灰原に3つの物を買う事となった。

予想以上の出費になったけど、アイツが喜んでくれるならそれも良しとするか・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3930g/>

コ哀のホワイトデー

2010年10月10日01時09分発行